

三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二
十三
十四
十五
十六
十七
十八
十九
二十
二十一
二十二
二十三
二十四
二十五
二十六
二十七
二十八
二十九
三十
三十一
三十二
三十三
三十四
三十五
三十六
三十七
三十八
三十九
四十
四十一
四十二
四十三
四十四
四十五
四十六
四十七
四十八
四十九
五十
五十一
五十二
五十三
五十四
五十五
五十六
五十七
五十八
五十九
六十
六十一
六十二
六十三
六十四
六十五
六十六
六十七
六十八
六十九
七十
七十一
七十二
七十三
七十四
七十五
七十六
七十七
七十八
七十九
八十
八十一
八十二
八十三
八十四
八十五
八十六
八十七
八十八
八十九
九十
九十一
九十二
九十三
九十四
九十五
九十六
九十七
九十八
九十九
一百

合唱教課書

附 奏 伴



旭

Allegro moderato

あ ふ げ や な ろ か め や

Allegro moderato

い ま ぞ の ほ る あ さ ひ こ へ て ん ち は み ひ か り あ

ひ て も の み な め き め ね

あ ふ げ や こ の よ の よ の も の み な に せい な め

く む あ さ ひ こ へ て ん ち は み ひ か り あ

の も の み な の ろ ー ド か っ た ふ さ や

清きすがた 南無佛にあはれ捧げん
三、月照る池に浮べる蓮

音なく散るよ ひらりひら ああ
霊のせて 南無佛にあはれ贈らん

○冬の黄昏

大童球溪作歌

一、夜の帷幕 襲ふみ空を

森に急ぐ晚鴉三つ四つ

あはれ淋し 寒風も咽ぶ

冬のたそがれ

二、今し閉づる夜の帷幕

装る眞玉か星の三つ四つ

あはれ 淋し 胸心も凍る

冬のたそがれ

○富士山

大童球溪作歌

仰ぎ見よや 富士の神山

白雲身に装ひて面は白雪

嗚呼玲瓏嗚呼崇高

嗚呼秀麗 嗚呼壯嚴

何をか吾等に教へ示す

見よ富士の高嶺見よ神の御山

仰ぎ見よや富士の神山

見よ神の御山見よ神の御山

仰げや富士の神山

○別れ

(低音) さらば別れ行くか友よ我が友

戀しき ふるさと

あとにして 行くか

(高音) さらば 別れ行くか 友よわが友

膝びしわれらを あとにして行くか

(中音) さらば 別れゆくか 友よわが友

(低音) さらば 行くか わが友

(高音) 懐かし我が友 幸くあれ 永久に

(中音) さらば さらば 幸くあれ 永久に

(高音) さらば さらば 睦びし われらを

忘れじな

(低音) さらば さらば 幾年月を睦びし

(高音) さらば さらば さらば われらを忘れじな

(中音) さらば 友よ 幸くあれよ

(低音) さらば 幸くあれよ さらば

○大和心

大童球溪作歌

一、旭に匂へるみ山の櫻

線亂比ひも あらしにさほひ

み雪と散りて思ひも残さぬ

清けきその様 たとへば御國に

其身を捧げて 散り行く大丈夫

これこそ まこと 大和心。

二、み空に秀づる富士の神山

玲瓏比ひも しら雪深く

其身を清め幾代の末迄

動かぬその様 たとへば 夷敵

直前に露だも動せぬ大丈夫

これこそ まこと 大和心。

○歸省

八波則吉作歌

山も川も 森も 鳥も 見るもの 聞くもの

なべて我友 なれ來し 友 幾夜夢みしぞ

静けき村 樂しき家 わが父 わが母

あなうれし今歸る なつかしのふるさと。

○旭

大童球溪作歌

仰げや 拜めや 今ぞ昇る 朝日子

天地は み光浴びて 萬物 眼 醒めぬ

仰げやこの世界の萬物に 生を恵む

朝日子

仰げやこの世界の萬物の ロード(命)か

尊とや

○夕べとあした

大童球溪作歌

時森に 急ぐ鴉三つ四つ二つ 友よび交し

啼き行く夕べの淋しや いと淋しや。

明けゆく空を森の鴉 アレ三つ四つ二つ先立

ちおくれ

○夏の海

亂れとぶ朝の心地よしや 心地よしや

(一) なぎさに寄する波 寄せてはかへる波

さらりさらり さら

みどりの海原こえて たのし夏の海

琴のしらべか 松吹く風

うれしき海

たのしき海

真砂を洗ふ波 洗ひてかへる波

さらりさらり さら たのし夏の海

輝く沖つ浪 照る日に躍る浪

さらりさらり さら 雄々し夏の海

白雲湧き立つところ 空と 水と

青きひと色 なつかし海

うねりにうねる浪 照る日に光る浪

さらりさらり さら 雄々し夏の海

○笛の音

月は出でたり 丘の上 たかく

千草 吹く風 あー

さやくしらし

ひびく 笛の音 胸に 流るる。



第二季乙組

古川保子

大正十四年三月二十五日 印刷
大正十四年四月五日 發行

非賣品



複製許不

載轉寫騰禁

編纂者 若狹萬次郎

印刷者 樂友社

發行者 音樂研究會

大阪市西區市岡辨天町一ノ八二

東京市牛込區筑土八幡町三四

○村の祭

一、黄金の穂波森によせて

浮き立つ村の祭日

里にひびく笛や太鼓

ぞめきぞめく賑ひ

二、とどろく太鼓浦曲わたり

ふきなす笛のゆかしや

けふの祭うたへ祝へ

こがねみのるよき日を

三、野山にとよむ宮の相撲

花火の音もいさまし

けふの祭うたへ祝へ

こがねみのるよき日を

○五 月 秋田實作歌

一、美はしきかな春はふけて

野にも山にもこゆき緑の

日増し色ます五月の日は

若き我等の胸もをどる

若き我等の胸もをどる

二、かのほこすぎのみ空さして

若きいのちの伸びゆくまゝに

のぞみ燃ゆる五月の日は

若き我等の胸もをどる

○埠頭の別れ

犬童球溪作歌

(甲) 行く手遠き旅に

(乙) 浪路遠き國に

(甲) 君は今し立つよ

(乙) 我は今し行くよ

(甲) 分つ袂に

(乙) 露おきまさる

(乙甲) 何れの時ら又も君と

再び茲に其手握らん

嗚呼名残はつきせぬ

けふの別れ

(以上反覆)

(甲) 風は木々になげき

(乙) 水は岸にむせぶ

(甲) 波は空を浸し

(乙) 雲は行手とぞす

(甲) 御爲に行きます

(乙) さは云へ御國の

(乙甲) 嗚呼嗚呼勇みて別れん

さらばさらば

○春の光

(一) うららの春の空

のどけき空の色

山にも野邊にも喜び満ちたり

咲く花霞に匂ひて

雲とまがひ

吹雪する花はひら

日傘にひらひら

神のめぐみ四方にあふれ

人の心常にしたのし春のながめ

胸を張りて乙女もいざ歌へララ……

生命若き春の姿ララ……

たのしや うれしや

(二) うららの春の海

なごめる海の色

岸にも島にもどけき清らたり

潮の香新たに白帆も

軽くすべり

櫻鯛をどるたぎ